

非正規雇用のなかの格差

—若年層における不本意型非正規に注目して—

仁愛大学

小林大祐

1 目的

本報告の目的は、若年非正規雇用層のなかに存在する差異を描き出すことである。このために、特に注目するのは非正規雇用の中でも「不本意型非正規」（太郎丸 2009; 山本 2011）と呼ばれる、非自発的に非正規雇用にとどまらざるを得ない層である。というのも、「不本意型非正規」は失業との類似性が高く（山本 2011）、比較的不利な階層的出自にあることが多い（小林 2011）という指摘がこれまでなされてきているためである。本報告では、独自の調査データを用い、不本意型非正規と本意型非正規の「格差」について概観していく。

2 方法

本報告で用いるのは、報告者の小林が科学研究費補助金の助成を受け 2012 年に実施した「働き方と生活についてのアンケート調査」のデータである。この調査は、全国の 23 歳から 39 歳までの男女を母集団に、調査会社の持つマスターサンプルを標本抽出枠とした二段階無作為抽出によって実施されたもので、サンプルサイズは 1200 である。調査モードは郵送と web のミックス・モード（逐次式）で、有効回収票は 620（回収率 51.7%）であった。この調査では、非正規雇用として職に就いている人に、なぜ非正規として仕事をしているのか理由をたずねており、そこで「正社員として採用されないから」と回答した者を「不本意型非正規」として分析を行った。

3 結果

基礎的分析においては、不本意型非正規の階層帰属意識や生活満足感の分布は、正規雇用はもとより本意型非正規と比べても低い水準にあり、失業者における分布に近いことが分かった。また、暮らし向きの程度の分布についても、男性の不本意型非正規においては、本意型非正規と比べより低い水準にあることが分かった。ただ、不本意型非正規の出身階層に、特に不利となる傾向は見られなかった（表省略。結果の詳細については、当日の報告資料として配付する）。

4 結論

以上の分析から得られた結論は、主に以下の 3 点である。①不本意型非正規の階層意識は、本意型よりも低く失業者により近く、これは山本（2011）の指摘とも整合的な結果である。②男性の不本意型非正規においてより低い暮らし向きの水準にあり、男性非正規雇用層の中には格差が見られる。③出身階層の影響は確認できなかった。ただし、本報告で用いた調査において、非正規雇用サンプルは詳細な分析耐えるだけの大きさでは無く、その点で結論には一定の留保が必要である。

謝辞 本研究は、科研費（25380646）（22730419）（25285147）（23223002）の助成による研究成果の一部である。なお、調査における web 回答には、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターが運営する、リアルタイム評価支援システム REAS(Realtime Evaluation Assistance System)を用いた。

(<http://reas2.code.ouj.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/top.woa/wa/default>)

文献

小林大祐, 2011, 「『フリーター』のタイプと出身階層」『理論と方法』26 (2) : 287-302.

太郎丸博, 2009, 『若年非正規雇用の社会学：階層・ジェンダー・グローバル化』大阪大学出版会.

山本勲, 2011, 「非正規雇用者の希望と現実：不本意型非正規雇用の実態」鶴・樋口・水町編『非正規雇用改革：日本の働き方をいかに変えるか』日本評論社.